



Title	マルタ語動詞体系の再編に関する試論
Author(s)	依田, 純和
Citation	アラブ・イスラム研究. 2021, 19, p. 181-214
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106152
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マルタ語動詞体系の再編に関する試論

依田 純和*

A tentative study on re-classification of the Maltese verbs

Maltese is an official language of the Republic of Malta and an official language of EU and spoken by about 400 thousand people. Unfortunately, this language is not broadly taught for foreigners, so the teaching system for non-natives is not well established. As a dialect of the Arabic language, the morphological system is based on so-called ‘root-and-pattern’ and accordingly the verbs are classified by the combination of the root structure (strong, weak, geminated etc.) and the templates (Form I, Form II etc.). This system is useful for understanding the verbal system of Maltese indeed, but some derived forms being less productive in Maltese, its systematicity tends to be corrupted. The aim of this article is to try to suggest a new verb classification without the conventional derivation system and the root structure.

1. はじめに

マルタ語¹⁾は系統論的にはアラビア語方言の1つであり、ローマ字による正書法を持つマルタ共和国の公用語の1つである。動詞形態の基本的な構造は（古典）アラビア語との共通点は多いが、他の現代方言と同様、完了形・未完了形²⁾の語幹の構造、分詞の派生のしかたなどでは（古典）アラビア語のそれとは相当の差異が生じている。特に派生形やそれに対応する分詞・動名詞の生成が生産的ではないので、従来の古典アラビア語文法に基づいた第I型から第X型、強動詞・弱動詞などの分類法は必ずしも合理的なものとは言えない。

本論考は、従来の古典アラビア語の体系にとらわれずにマルタ語動詞の実態に基づいてより合理的な独自の体系の構築を試みるものである。2種類の活用形式－接頭辞活用形と接尾辞活用形－に用いられる動詞語幹のパターンを中心に議論を進め、派生形や語根の種類による分類（強動詞・弱動詞・重子音動詞）をより単純な語形にまとめることを試みる。

凡例

Ā：本論考では特に第III, VI型動詞の第1音節母音āまたはieを代表するもの（歴史的なāは、マルタ語は音韻環境に応じてāまたはieで実現する：tqābad 争う（cf.

* 大阪大学言語文化研究科准教授

1) 本論考で扱う「マルタ語」とは「標準マルタ語」を指す。

2) マルタ語についてはそれぞれ「接尾辞活用形」「接頭辞活用形」と呼ぶ。

古典アラビア語 taqābaḍ-), siefer 旅する (cf. 古典アラビア語 sāfar-))。

C : 任意の子音

PC (prefix conjugation) : 接頭辞活用形

Q : 4 語根動詞 (QI= 4 語根動詞基本形、QII= 4 語根動詞第 II 型)

SC (suffix conjugation) : 接尾辞活用形

T : 特に派生形 (3 語根動詞第 V, VI 型、4 語根動詞第 II 型) の接頭辞 t の原音素を表す。マルタ語ではこの接頭辞が ċV, dV, ġV, sV, xV, žV, (zV) で始まる動詞語幹に付くとき、これらの子音に同化する (*tġieled > ġġieled 喧嘩する)。

V : 任意の母音

√ : 語根

- : 語幹と接辞の境界

... : 動詞語幹または動詞語幹の一部 (語形を特定できない、またはしない場合)

第 1 根素 : 語根を構成する 1 番目の子音

第 2 根素 : 語根を構成する 2 番目の子音

第 3 根素 : 語根を構成する 3 番目の子音

代表形 : 接尾辞活用形 3.m.sg. (= 接尾辞活用形語幹)

語幹母音 : 語幹の最終音節の母音

マルタ語の表記について

(1) 本論考ではマルタ語の単語は正書法に基づいた形式で示す。

(2) マルタ語で用いられるアルファベットは以下の通り。発音に注意を要する文字のみ発音記号を付した。

a b ċ [ʧ], d, e, f, g [g], ġ [dʒ], gh (無音)³⁾, h (無音)⁴⁾, i, j [j], k, l, m, n, o, p, q [ʔ], r, s, t, u, v, w, x [ʃ], ž [z], z [ts]

(3) 正書法では長母音やアクセント (ロマンス系の名詞で語末母音にアクセントがある場合を除いて) は表示されないが、本論考では長母音を長母音記号 (マクロン) で表す。またアクセント位置を明示する必要がある場合は、アクセント記号を付す。なお、長母音は必ずアクセントを担う。

(3) 流音+C または重子音で始まる語は、①語頭、②語中で直前の語が子音で終わる際に補助母音 i が付くが、本論考では省略した。

3) アルファベットの名称は ghajn [ˈaːjn] (本論考中でこの名称を用いる)。この文字自体は音を持たないが、前後の母音を長母音化する (もともとアクセントがある場合除き、この長母音化によってアクセントを担うことはない)、または二重母音を発生させるなどの機能を持つ : jaghmlu [ˈjaːmlu] 彼らはする、semghet [ˈsemeːt], ghandi [ˈaːndi], semghu [ˈsemeu ~ ˈsemou]。なお、語末では [h] と発音される : mitfūgh [mitˈfuːh]。

4) この文字自体は音を持たないが、gh と同様、前後の母音を長母音化するなどの機能を持つ : hawn [ˈaːwn], fehmu [ˈfeːmu] など。なお、語末では [h] と発音される : qabduh [ʔabˈduːh]。

2. マルタ語について

マルタ語は、マルタ共和国の2つの公用語の1つ（もう1つは英語）である。同国は欧州連合の加盟国でもあるので、その公用語としても認められている。歴史的には8世紀のアグラブ朝期に現在のチュニジア付近を出発したアラビア語・ベルベル語話者がシチリア島を征服した後マルタ島に到達（871年）し、爾来ノルマン人による征服（1127年）⁵⁾によりキリスト教世界に含まるまでのおよそ350年間に同地域にアラビア語方言が定着した⁶⁾。このアラビア語方言はその後、他のアラビア語世界との交流が断絶し、ロマンス系言語や英語などから語彙や文法の影響も受ける中、途中消滅することなく現在に至るまで用いられてきた。その結果が現在のマルタ語である。特にロマンス系の語彙を多く含み⁷⁾、またアラビア語の ح と خ が合流し h に、同 ع と غ が合流し gh（標準マルタ語では無音）になるなどの現象は見られるが、マルタ語は基本的にアラビア語の特徴を引き継いでいると言える。

アラビア語方言の地理的な分類上、マルタ語は動詞未完了形の活用接頭辞の形式や形態論などの点で西方方言に属しているとみなされるが⁸⁾、同時に語彙の面で東方方言、特にレバント地域の方言との類似性も指摘されている⁹⁾。

東方方言	西方方言		
パレスチナ方言	マルタ語	チュニス方言	
<i>ʔaktub</i>	<i>niktib</i>	<i>niktib</i>	私は書く
<i>nuktub</i>	<i>niktbu</i>	<i>niktbu</i>	私達は書く

3. マルタ語の動詞の分類

20世紀以降に出版されたマルタ語の文法書では、マルタ人向け、外国人向けを問わず動詞は語根の種類による分類（強動詞・弱動詞・重子音動詞・外来動詞・不規則動詞）と第I-X型の派生形組み合わせによる分類がなされているが¹⁰⁾、20世紀以前

5) マルタ島がイスラーム支配下に置かれた後のノルマン人によるマルタ島攻撃は1091年に行われたが、ノルマン人による支配には至らなかった（Wettinger (1995) pp. 38-39）。

6) ノルマン人による征服の後もムスリムは残存したが、最終的には1240-1250年頃フレデリック2世によりマルタより追放された。この時、追放の対象はあくまで「ムスリム」であったため、キリスト教への改宗者も多数いたようである（Wettinger (1986) p. 99）。

7) マルタ語には「動詞 gie「来る」＋受動分詞」による受動態表現があり（L-artikolu gie miktub mill-gdid その論文は再び書かれた）、これはイタリア語の受動態「動詞「venire 来る」＋過去分詞」に由来する文法借用である。このように統語論にもロマンス系言語の影響が見られる。

8) 1.sg. で *n-*...、1.pl. で *n-...-u* となるのは西方方言の大きな特徴ではあるが、絶対的なものではなく、この他の特徴と合わせて西方方言と判断する。

9) Borg (1997), Wilmsen & Al-Sayyed (2019) など。また、マルタ語はアラビア語方言の一変種であることは疑いがなく、正則アラビア語とダイグロシアを形成しないこと、ローマ字による正書法の存在、一国の公用語となっていることなど、他の諸方言とは一線を画す（Kaye & Rosenhouse (1997) p. 263）。

10) Sutcliffe (1936) p. 81 ff., Brother Henry (1980) p. 78 ff., Cachia (1994) p. 196 ff., Aquilina (1965) p. 151 ff.

の文法書¹¹⁾では様々な分類の方法がみられる。近年では Camilleri (2014)、Hoberman & Aronoff (2003) などが動詞語幹の分類について詳細な研究を行っている。ここでは新しい分類法を検討する前に、既存の分類を Aquilina (1965) に基づいて示す。

3.1. 語根の種類による分類

動詞は語根を構成する子音の種類によって次のように分類できる。以下では代表形を例示する。

3.1.1. : 強動詞 : 下記 3.1.2.~3.1.6. に当てはまらないもの。

kiteb 書く ngħalaq 閉じる tkellem 話す siefer 旅する

3.1.2. ghajn 動詞 : 第3根素が ghajn の動詞

第3根素が ghajn の動詞はマルタ語では強動詞とは異なる語幹形態を持つので(下記 4.1.2.1.2. 参照) ghajn 動詞と呼び強動詞と区別する¹²⁾。

qala' 稼ぐ tefa' 投げる nqala' 生じる

マルタ語の正書法では歴史的な -agh# は正書法で -a' と表記される¹³⁾。この場合'は無音である : tefa' ['tefa]。

3.1.3. 重子音動詞 : 第2根素と第3根素が同一のもの

radd 返す mtedd 伸びる

3.1.4. 弱動詞 : 語根に w または j を含むもの。

3.1.4.1. 第1根素弱動詞 (= 頭弱動詞) (実際には第1根素が w のもののみ)

waqaf 止まる wasal 到着する wiled 生まれる wiret 相続する

3.1.4.2. 第2根素弱動詞 (= 間弱動詞)

biegh 売る (√ b-j-gh) gieb 持って来る (√ ġ-j-b) htieg 必要とする (√ ħ-w-ġ)

3.1.4.3. 第3根素弱動詞 (= 末弱動詞)

bena 建てる (√ b-n-j) ntesa 忘れられる (√ n-s-j)

第2根素・第3根素の両方が弱子音の場合は、第3根素弱動詞となる。

xewa 炙る (√ x-w-j) heja 活気づける (√ ħ-j-j)¹⁴⁾

11) De Soldanis (1750), Vassalli (1791), Vassalli (1827), Panzavecchia (1845) など。なお、Vella (1931) は20世紀の作品だが第I-X型によらない。

12) Cremona は強動詞の変種としている (Cremona (1961) p. 120.)。

13) 例外として「ntabagh 印刷される」がある。歴史的な -agh# 以外の環境では gh が標記される : 「mitfugh 投げられた」など。

14) 語根としては重子音語根だが、動詞形態は第3根素弱動詞である。

3.1.5. 外来動詞（ロマンス語または英語起源の動詞で上記の動詞の語形に当てはまらないもの）

ddeċiċda 決定する stūdjja 勉強する bbrejkja ブレーキをかける

ロマンス語・英語起源の動詞の中には paxxa 喜ばせる（第3根素弱動詞第II型）
ċempel 電話する（4語根動詞基本形）など、セム語起源の動詞の語形にあてはまるものがある。本論考では語形態を基準とした分析を行うのでこれらは外来動詞とみなさず、語形によって 3.1.1.-3.1.4. のいずれかとして扱う。

3.1.6. 不規則動詞

Aquilina (1965) pp. 194-201 は以下のものを不規則動詞として挙げている。

ta 与える nghata 与えられる ha 取る ttiehed 取られる ra 見る kien jāf 知っている
qāl 言う ntqāl 言われる nghād 言われる ġie 来る mār 行く idda 輝く iżza (hajr) 感謝する（名詞 hajr と合わせて「感謝する」） emmen 信じる twemmen 信じられる
kellu ～を持っている（持っていた） waqaf 止まる jisem ～という名である

Ambros (1998) p. 167 はこれらに加え次のものも不規則動詞としている。

wera 見せる kiel 食べる

本論考では、異なった語根による語幹が混在しているもの、音韻規則などで予測できない語幹が含まれるもの、規則動詞の語形に当てはまらないものを不規則動詞とする。具体的には以下の動詞である。

qāl 言う	√ q-w-l (SC 3.m.sg. qāl) と √ gh-j-d (SC 1.pl. ghidna) が混在
mār 行く	√ m-w-r (SC 3.m.sg. mār) と √ m-r-r (SC 3.f.sg. marret) が混在
kiel 食べる	√ k-w-l (SC 3.m.sg. kiel) と √ w-k-l ¹⁵⁾ (PC 3.m.sg. jiekol) が混在
kien jāf 知っている	jāf は規則動詞の語形にあてはまらない ¹⁶⁾
ha 取る	規則動詞の語形にあてはまらない・√ h-w-d (SC 3.f.sg. hādet) と √ ʔ-h-d (PC 3.pl. jieħdu) が混在・第3根素 d が現れない人称の存在 (SC 3.m.sg. ha, PC 3.m.sg. jieħu)
ta 与える	規則動詞の語形にあてはまらない
ra 見る	規則動詞の語形にあてはまらない
wera 見せる	PC 語幹 (-ūri) の形成が不規則
ġie 来る	規則動詞の語形にあてはまらない

15) 語根として ʔ を想定する。なお、jiekol は「waqaf 止まる (√ w-q-f)」の PC 3.m.sg. jieqaf と同じ音節構造 (jieCVC) になること、kiel と関連する語で「wikkiel 大食い」のような語もあるので、jiekol の語根を (√ w-k-l) とする考え方も可能である。

16) 動詞 jāf は「知っている（ある情報を得て知識として持っている状態）」を表す。マルタ語の動詞の代表形は接尾辞活用形 3.m.sg. であるが、jāf に対応する接尾辞活用形が存在しないので、kien を付けて代表形としたものである。本論考では jāf の部分のみ分析の対象とする。

また、Aquilina が挙げた「不規則動詞」のうち次の動詞は本論考の不規則動詞の定義に一致しないので規則動詞として扱う。

(1) nghata, ttiehed, ntqāl, nghād, waqaf : 動詞語幹自体は不規則性がみられない（特に nghata, ttiehed, ntqāl, nghād, twemmen について、Aquilina はそれぞれ ta, ħa, qāl, emmen の派生形の例として挙げただけかと思われる）。

(2) idda, izza, emmen : 語頭に仮想の C（＝語根 ♀）を想定して規則動詞として扱う。

強動詞 : emmen 信じる twemmen 信じられる ttiehed 取られる

第1根素弱動詞 : waqaf 止まる

第2根素弱動詞 : ntqāl 言われる nghād 言われる

第3根素弱動詞 : nghata 与えられる idda 輝く izza (hajr) 感謝する

また、次の動詞は、通常の活用形態によらないので本論考では取り扱わない。

kellu ～を持っている（持っていた）

jisem ～という名である

3.1.7. 動詞語幹の語形態のまとめ

以下では語根の種類ではなく動詞語幹の形態による分類を行う。上記 3.1.1.-3.1.4. で分類された動詞を、代表形の末音節の形態を基準に再分類すると次のようになる。

第1活用（代表形が CVC で終わるもの）

第2活用（代表形が Ca' で終わるもの）

第3活用（代表形が CVC_iC_i で終わるもの）

第4活用（代表形が CVC̣ で終わるもの）

第5活用（代表形が Ca で終わるもの）

外来動詞と不規則動詞は個別の分類とする。

これ以降は「強動詞・第2根素弱動詞」など旧来の分類名称ではなく、第1活用、第2活用の名称を用いる。

3.2. 派生形による分類

以下ではまず従来のアラビア語の基本形・派生形を基準に分類し、語幹の音節構造を分析する。以下で用いる表の上段は音節構造、下段は実例、また太字部分は語幹である。

語幹は SC 3.m.sg. と PC 3.m.sg. を挙げ、PC 3.m.sg. には細字で活用接頭辞 j-, ji- を付した (j- と ji- の分布については下記 3.2.1.2. 参照)。

3.2.1. 第1活用（代表形が CVC で終わるもの）

3.2.1.1. 語幹形態

	SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg. ¹⁷⁾	
3 語根			
基本形	CVCVC qabad	j-VCCVC ¹⁸⁾ j-áqbad	掴む
	wVCVC wasal	j-VCVC ¹⁹⁾ j-ásal	到着する
II	CVCCVC naddaf	j-CVCCVC j-naddaf	掃除する
III	CĀCVC siefer	j-CĀCVC j-siefer	旅する
V	TCVCCVC tkellem	ji-TCVCCVC ji-tkellem	話す
VI	TCĀCVC tbierrek	ji-TCĀCVC ji-tbierrek	祝福される
VII	nCVCVC nkiteb	ji-nCVCVC ji-nkiteb	登録する
VIII	CtVCVC ftakar	ji-CtVCVC ji-ftakar	思い出す
VII+VIII ²⁰⁾	ntCVCVC ntrabat	ji-ntCVCVC ji-ntrabat	結ばれる
	nCtVCVC nsteraq	ji-nCtVCVC ji-nsteraq	盗まれる

17) 活用接頭辞 j-, ji-を取り除いたものを PC 語幹とする。

18) アラビア語では接頭辞活用形では ya-, ta-, °a-, na-（子音＋母音）が活用接頭辞とみなされるが、マルタ語の 3 語根動詞基本形では接頭辞の母音が動詞によって異なる（多くの場合は音韻環境で条件づけられるが、語彙的に決まっている場合もある（長渡 (2002) p. 168））ので、本論考では 3 語根動詞基本形の接頭辞の母音の部分も語幹の一部とみなす。

19) 「第1根素弱動詞」の PC 語幹は j-VCVC, j-ieVCV のような音節構造となる（後者は（「waqaf 止まる」のみ）。語幹と活用接辞の組み合わせのパターンは語末音節によって決まり、語幹第1音節の構造の違いは分類の基準としては無意味なので特に従来の第1根素弱動詞は第1活用の異形態として扱う。

20) 第 VII 型の特徴である接頭辞 n- と第 VIII 型の特徴である接中辞 -t- が混在した形なので、本論考では VII+VIII とする。Cachia (1994) p. 217 はこの派生形に関し、第1根素が l, m, n, r, w の動詞では ntCVCVC が、第1根素が s, x の動詞では nCtVCVC となるとしている。しかし、語根 √s-r-m による派生形動詞には「nstaram 混乱する」とならんで staram, nsaram も認められる。なお、第 VII 型の n- と同様の機能を持つ接頭辞 t- については Grand'henry (1975) を見よ。

IX ²¹⁾	CCVC hmār	ji-CCVC ji-hmār	赤くなる
X	stVCCVC stenbah	ji-stVCCVC ji-stenbah	注意する
II+X ²²⁾	stCVCCVC stkerrah	ji-stCVCCVC jistkerrah	嫌う
4 語根			
基本形 (QI)	CVCCVC čempel	j-CVCCVC j-čempel	電話する
QII	TCVCCVC tfixkel	ji-TCVCCVC ji-tfixkel	混乱する

3.2.1.2. 語幹の分類

以上では動詞を従来の派生形ごとに分類したが、これらを単純に語幹の形態に基づいて再分類すると以下のような9種類の語幹にまとめることができる。この方式では、例えば3語根動詞第V型、第X形、QIIは音節構造の点では同一（いずれもCCVCCVC）なので同型の語幹とみなすことができる（TもCとして扱う）。

		SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg.
1	基本形	CVCVC	j-VCCVC / j-VVCVC / j-ieVCV
2	VII, VIII	CCVCVC	ji-CCVCVC
3	VII+VIII	CCCVCVC	ji-CCCVCVC
4	II, QI	CVCCVC	j-CVCCVC
5	V, QII, X	CCVCCVC	ji-CCVCCVC
6	II+X	CCCVCCVC	ji-CCCVCCVC
7	III	CĀCVC	j-CĀCVC
8	VI	CCĀCVC	ji-CCĀCVC
9	IX	CCVC	ji-CCVC

(1) 基本形ではSC語幹とPC語幹が異なるが、それ以外では全て両者は同一形態である。

(2) 接尾辞活用形では活用接辞は接尾辞に限られるので、動詞語頭の子音の数の違いは活用に影響しない。

(3) 接頭辞活用形の活用接頭辞には2つの体系（j-, t-, n- と ji-, ti-, ni-）があり、その分布は音韻論的に条件づけられる：j-, t-, n- は CV, CĀ で始まる語幹に、ji-, ti-, ni- は CCV, CCCV, CCVC で始まる語幹に付く。

21) この長母音を含む形は、第3根素を重子音化する第IX型に対応する北アフリカで一般的な派生形。この語形は第2根素弱動詞2と同形である（下記3.2.4.1.を見よ）。

22) 第VII型の異形態と共に、古典アラビア語にはない派生形で、第II型と第X型の複合したものと考えられる。

1から8の動詞はいずれも SC 語幹（＝代表形）の最終音節が CVC だが、9（古典アラビア語では強動詞の第 IX 型）のみ CCVC となっており異質である。本論考では上述のように語幹形態によって分類するので、この語幹は下記 3.2.4.1. で論じる第 4 活用動詞とみなす。

結果的に①SC 語幹と PC 語幹が異なるもの、②両者の語幹が同一のものの 2 種類が確認される。②については 3 種類の音節構造があり、語幹末音節 CVC の前に付く音節が (C)CCV のものを a、(C)(C)CVC のものを b、(C)CĀ のものを c と下位分類する。この原則は第 2 活用・第 5 活用にも適用する。

	SC 語幹	PC 語幹
①	CVCVC	VCCVC / VCVC / ieVCV
②a	(C)CCVCVC	
②b	(C)(C)CVCCVC	
②c	(C)CĀCVC	

今後、①のタイプを「第 1 活用①」、②のタイプを「第 2 活用②a」「第 2 活用②b」などと表示することにする（以下同様）。

3.2.2. 第 2 活用（代表形が Ca' で終わるもの）

3.2.2.1. 語幹形態（3 語根動詞のみ）

	SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg.	
基本形	CVCa' neža'	j-VCCa' j-inža'	脱ぐ
	wVCa' wesa'	j-VCa' j-esa'	容量がある
II	CVCCa' semma'	j-CVCCa' j-semma'	聞かせる
V	tCVCCa' tbažža'	ji-tCVCCa' ji-tbažža'	おびえる
VII	nCVCa' nbala'	ji-nCVCa' ji-nbala'	飲み込まれる
VIII	CtVCa' ltaqa'	ji-CtVCa' ji-ltaqa'	会う
VII+VIII	ntCVCa' ntltaqa'	ji-ntCVCa' ji-ntltaqa'	受け入れらる
	nCtVCa' nstema'	ji-nCtVCa' ji-nstema'	聞こえる

3.2.2.2. 語幹の分類

第 1 活用動詞と同じ基準で第 2 活用動詞の語幹を再分類すると以下のような 5 種類

の語幹にまとめることができる。

		SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg.
1	基本形	CVCa'	j-VCCa' / j-VCa'
2	VII, VIII	CCVCa'	ji-CCVCa'
3	VII+VIII	CCCVCa'	ji-CCCVCa'
4	II	CVCCa'	j-CVCCa'
5	V	CCVCCa'	ji-CCVCCa'

上表から①SC 語幹と PC 語幹が異なるもの、②両者の語幹が同一のものの2種類が確認される。②については2種類の音節構造がある。

	SC 語幹	PC 語幹
①	CVCa'	VCCa' / VCa'
②a	(C)CCVCa'	
②b	(C)CVCCa'	

3.2.3. 第3活用（代表形が CVC_iC_i で終わるもの（語幹末の CC が重子音でない動詞は存在しないので今後 i の表示は省略する））

3.2.3.1. 語幹形態

	SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg.	
基本形	CVCC radd	j-CVCC j-rodd	返す
VII	nCVCC nhass	ji-nCVCC ji-nhass	感じられる
VIII	CtVCC rtadd	ji-CtVCC ji-rtadd	返される
VII+VIII	ntCVCC ntbell	ji-ntCVCC ji-ntbell	濡れる
	nCtVCC nstadd	ji-nCtVCC ji-nstadd	ふさがれる
X	stCVCC stekenn	ji-stCVCC ji-stkenn	避難する

3.2.3.2. 語幹の分類

第1活用動詞と同じ基準で第3活用動詞の語幹を再分類すると以下のような3種類の語幹にまとめることができる。

		SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg.
1	基本形	CV _i CC	j-CV _j CC ²³⁾
2	VII, VIII	CCVCC	ji-CCVCC
3	VII+VIII, X	CCCVC	ji-CCCVCC

上表から①SC 語幹と PC 語幹が異なるもの、②両者の語幹が同一のものの2種類が確認される。

	SC 語幹	PC 語幹
①	CV _i CC	CV _j CC
②	(C)CCVCC	

3.2.4. 第4活用（代表形が CVC̄ で終わるもの）

上記 3.2.1.2. で述べた通り強動詞第 IX 型は第2根素弱動詞第 VII 型・第 VIII 型と同じ音節構造なのでここに属するものとする。

3.2.4.1. 語幹形態

	SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg.	
基本形	zār CVC̄	jzūr j-CVC̄	訪問する
VII	nbiegh nCVC̄	jinbiegh ji-nCVC̄	売れる
VIII	htieġ CtVC̄	jihtieġ ji-CtVC̄	必要とする
強動詞第 IX 型	hmār CCVC̄	jihmār ji-CCVC̄	赤くなる
VII+VIII	ntqāl ntCVC̄	jintqāl ji-ntCVC̄	言われる ²⁴⁾
	nstāb nCtVC̄	jinstāb ji-nCtVC̄	見いだされる ²⁵⁾
X	strieħ stCVC̄	jistrieħ ji-stCVC̄	休息する

3.2.4.2. 語幹の分類

第1活用動詞と同じ基準で第4活用動詞の語幹を再分類すると以下のような3種類の語幹にまとめることができる。

23) PC 語幹の音節構造は SC 語幹と同一だが語幹母音が異なることがあるので異形態とした。

24) nt- による ntqāl と並んで n- による nqāl も自由変異として用いられる。

25) nCt- による nstāb と並んで n- による nsāb も自由変異として用いられる。

		SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg.
1	基本形	CVC	j-CVC ²⁶⁾
2	VII, VIII, , 強動詞第 IX 型	CCVC	ji-CCVC
3	VII+VIII, X	CCCVC	ji-CCCVC

上表から①SC 語幹と PC 語幹が異なるもの、②両者の語幹が同一のものの 2 種類が確認される。

	SC 語幹	PC 語幹
①	CVC	CVC
②	(C)CCVC	

3.2.5. 第 5 活用（代表形が Ca で終わるもの）

3.2.5.1. 語幹形態

	SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg.	
3 語根動詞			
基本形	CVCa benā	j-VCCi j-ibni	建てる
	CVCa nesa	j-VCCa j-insa	忘れる
II	CVCCa semma	j-CVCCi j-semmi	言及する
III	CĀCa miera	j-CĀCi j-mieri	反対する
V	TCVCCa ssemma	ji-TCVCCa ji-ssemma	言及される
VI	TCĀCa tkāza	ji-TCĀCa ji-tkāza	馬鹿にする
VII	nCVCa nheba	ji-nCVCa ji-nheba	隠れる
VIII	CtVCa mtela	ji-CtVCa ²⁷⁾ ji-mtela	満ちる
VII+VIII	ntCVCa ntnesa	ji-ntCVCa ji-ntnesa	忘れられる
	nCtVCa nxtara	ji-nCtVCa ji-nxtara	買われる

26) PC 語幹の音節構造は SC 語幹と同一だが語幹母音が異なることがあるので異形態とした。

27) 「xtara 買う」は代表形では第 VIII 型に相当するが、PC 3.m.sg. で ji-CCCi となり不規則である。

X	stVCCa stahba	ji-stVCCa ji-stahba	隠れる
4 語根動詞			
基本形 (QI)	CVCCa saqsa	j-CVCCi j- saqsi	尋ねる

3.2.5.2. 語幹の分類

第1活用動詞と同じ基準で第5活用動詞の語幹を再分類すると以下のような8種類の語幹にまとめることができる。

		SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg.
1	基本形	CVCa	j-VCCi
2		CVCa	j-VCCa
3	VII, VIII	CCVCa	ji-CCVCa
4	VII+VIII	CCCVCCa	ji-CCCVCCa
5	II, QI	CVCCa	j-CVCCi
6	V, X, QI	CCVCCa	ji-CCVCCa
7	III	CĀCa	j-CĀCi
8	VI	CCĀCa	ji-CCĀCa

上表から、①SC 語幹と PC 語幹が異なるもの（音節構造と語末母音の違いによる4種類）、②両者の語幹が同一のもの（3種類の音節構造）の2種類が確認される。①についてはPC 語幹末母音が -a, -i の2種類があり、この違いは活用接辞の形態の選択に影響するので -a で終わるものを① α および① β （PC に付く活用接辞のタイプによる異形態があるので更に α と β に分ける。詳細は 4.2.1. を見よ）-i で終わるものを① γ とする。

	SC 語幹	PC 語幹
① α , ① β	CVCa	VCCa
① γ	CVCa	VCCi
①b	CVCCa	CVCCi
①c	CĀCa	CĀCi
②a	(C)CCVCa	
②b	CCVCCa	
②c	CCĀCa	

3.2.6. 外来動詞

外来動詞は第5活用と同様に -a で終わる。派生形は以下のようないくつかの動詞で認められる。外来動詞は決まった語形がないので、語幹ごとの分類はしない。

	SC 3.m.sg.	PC 3.m.sg.	
基本形	ūza paxxa	j-ūza j-paxxi	使う 喜ばせる
派生形	ntūza tpaxxa	ji-ntūza ji-tpaxxa	使われる 喜ばせられる

3.2.7. 不規則動詞

ここでは SC 3.m.sg.、PC 3.m.sg. の語形に基づいて分類する（決まった語形がないので、語幹ごとの分類はしない。）。この2つの形は第1・3・4・5活用のいずれかに当てはまる。

SC 3.m.sg.		PC 3.m.sg.		
gie	第5活用	j-āf	第4活用	知っている
ha	第5活用	j-īgi	第5活用	来る
kiel	第4活用	j-iehu	第5活用	取る
mār	第4活用	j-iekol	第1活用	食べる
qāl	第4活用	j-mūr	第3活用	行く
ra	第5活用	j-ghid	第4活用	言う
ta	第5活用	j-āra	第5活用	見る
wera	第5活用	j-aghti	第5活用	与える
		j-ūri	第5活用	見せる

4. 活用接辞

以下では、活用接辞のタイプに基づいて語幹との関係を分析する。

4.1. 接尾辞活用形

4.1.1. SC 接尾辞のタイプ

以下では各活用形から活用接尾辞のタイプを観察する。第5活用、外来動詞では活用接尾辞では異形態が生じる。なお、これ以降は活用接尾辞を太字で示す。

	第1活用	第2活用	第3活用	第4活用	
3.m.sg.	qabad	neza'	radd	zār	
3.f.sg.	qabd- et	nežgh- et	radd- et	zār- et	
2.sg. & 1.sg.	qbad- t	nžaj- t	radděj- t	zor- t	
3.pl.	qabd- u	nežgh- u	radd- éw (radd- u)	zār- u	
2.pl.	qbad- tu	nžaj- tu	radděj- tu	zor- tu	
1.pl.	qbad- na	nžaj- na	radděj- na	zor- na	

	第 5 活用		外来動詞		
3.m.sg.	béna	qara	pínga	stūdja	stabilíxxa
3.f.sg.	bn-iet	qr-āt	ping-iet	studj-āt	stabil-iet
2.sg. & 1.sg.	bnej-t	qraj-t	pingéj-t	studjáj-t	stabiléj-t
3.pl.	bn-ew	qr-āw	ping-ew	studj-āw	stabil-ew
2.pl.	bnéj-tu	qraj-tu	pingéj-tu	studjaj-tu	stabilej-tu
1.pl.	bnej-na	qraj-na	pingej-na	studjaj-na	stabilej-na

上表から、次の 3 種類の活用接尾辞の体系（「SC 接尾辞 1」～「SC 接尾辞 3」）が認められる。

	SC 接尾辞 1	SC 接尾辞 2	SC 接尾辞 3
	第 1 ・ 2 ・ 4 活用	第 3 活用	第 5 活用 ・ 外来動詞
3.m.sg.	-	-	-
3.f.sg.	-et	-et	-iet / -āt
2.sg. & 1.sg.	-t	-t	-t
3.pl.	-u	-éw (-u)	-éw / -āw
2.pl.	-tu	-tu	-tu
1.pl.	-na	-na	-na

SC 接尾辞 2 : 3.pl. の活用接尾辞は通常 -éw であるが、まれに -u も用いられる。

SC 接尾辞 3 : 3.f.sg., 3.pl. に付く活用接尾辞に異形態があり、その選択は語彙的なものである。なお、stabilixxa のように代表形が -ixxa で終わる動詞は、この -ixxa が SC では 3.m.sg. 以外の人称で消失する。

SC 接尾辞 2 の 3.pl. -éw、SC 接尾辞 3 の 3.f.sg., -iet, -āt、3.pl. -éw, -āw はアクセントを担うので、これらが付く動詞語幹の母音はアクセントを失う。Ā を含む c 語幹では、この Ā が短母音化し（長母音は常にアクセントを担うので）、a, e, i のいずれか（選択は語彙的）で実現する。

また、活用接尾辞の有無・接尾辞の性質によって次の 3 種類が認められ、それぞれ語幹 A・B・C と表示する。

接尾辞ゼロ（3.m.sg.）：語幹 A

母音で始まる活用接尾辞（3.f. -et, -iet, -āt, 3.pl. -u, -ew, -āw）：語幹 B

子音で始まる活用接尾辞（2.sg. & 1.sg. -t, 2.pl. -tu, 1.pl. -na（1・2 人称））：語幹 C

4.1.2. 接尾辞を伴う語幹の異形態

動詞語幹は上記で確認した語幹 A・B・C の 3 つの状況下で異形態が生じる。以下では SC 接尾辞ごとに語幹の異形態を観察する。

4.1.2.1. SC 接尾辞 1 が付く動詞活用形

4.1.2.1.1. 第 1 活用

		語幹 A	語幹 B	語幹 C
①	qabad 掴む	CVCVC qábad	CVCC- qábd-	CCVC- qbád-
②a	nkiteb 登録する	CCVCVC nkíteb	CCVCC- nkítb-	CCCVC- ²⁸⁾ nktíb-
②a'	ntrabat 結ばれる	CCCVCVC ntrábat	CCCVCC- ntrábt-	CCCVCVC- ntrabát
②b	čempel 電話する tkellem 話す stkerrah 嫌う	(C)(C)CVCVC čémpel tkéllem stkérrah	(C)(C)CVCCC- čémpl- tkéllm- stkérrh-	(C)(C)CVCCVC- čémpíl- tkellím- stkerráh-
②c	siefer 旅する tqābad 喧嘩する	(C)CĀCVC siefer tqābad	(C)CĀCC- siefr- tqābd-	(C)CVCVC- sifír- tqabád-
SC 接尾辞 1			-et, -u	-t, -tu, -na

語幹 A との比較において（以下同様）、語幹 B では次のような現象が生じる。

- (1) すべての活用形で第 2 音節の母音が脱落する。
 (2) ②b : (1) 第 2 根素の部分が ww, jj となっている場合、それぞれ単子音化し w, j となる。(2) 第 2 根素と第 3 根素が同一子音の場合（例 √ġ-d-d）、3 重子音が生じることになる（ġeddd-）が、これが 2 重子音となる（4.2.2.1.1.を参照）。

	語幹 A	語幹 B	語幹 C
(1) 起こす	qájjem	qájjm-	qajjím-
(2) 刷新する	ġédded	ġédd-	ġeddíd-

語幹 C では次のような現象が生じる。

- (1) ① : 第 1 音節の母音が脱落する。
 (2) ②a : この語幹は 3.2.1.2. では (C)CCVCVC という音節構造の語幹であるとしたが、CCVCVC 語幹では第 1 音節の母音が脱落するが、CCCVCVC 語幹では脱落せずアクセントが第 2 音節に移動するなど、両者の形態が異なるので今後 CCV で始まる語幹を「②a」、CCCV で始まる語幹を「②a'」として区別する。この分類は第 2 活用、第 5 活用も適用する。
 (3) ②b : アクセントが第 2 音節に移動する。
 (4) ②c : アクセントが第 2 音節に移動することで第 1 音節の長母音が短母音化する。

28) 「ftakar 思い出す」のみ語幹 C は ftakar-となる。

また、語幹 C には語幹の構成要素に応じて以下のような異形態がある。

- (1) 語幹 A の末音節の母音が e の時、語幹 C で i に変わる。
 (2) 語幹 A の語頭の子音が gh の時、語幹 C で第 1 音節の母音は消失しない。
 (3) 語幹 A の語頭が wa の時、語幹 C で第 1 音節の母音は消失する、またはしない。

	語幹 A	語幹 B	語幹 C
(1) 出る	háreg	harg-	hriġ-
(2) する	ghámel	gháml-	ghamíl-
(3) 到着する	wásal	wásl-	wasál- ~ wsál-

これらのうち (1) はすべての活用形に、(2) は①、②a に共通する現象である。

4.1.2.1.2. 第 2 活用

		語幹 A	語幹 B	語幹 C
①	neža' 脱ぐ	CVCa' néža'	CVCgh- nézgh-	CCáj- nżáj-
②a	ltaqa' 会う	CCVCa' ltaqa'	CCVCgh- ltaqgh-	CCCáj- ltqáj-
②a'	nstema' 聞こえる	CCCVCa' nstéma'	CCCVCgh- nstémgh-	CCCVCáj- nstemáj-
②b	semma' 聞かせる tbeżża' 恐れる	(C)CVCa' sémma' tbeżża'	(C)CVCgh- sémgh- tbeżżgh-	(C)CVCCáj- semmáj- tbeżżáj-
SC 接尾辞 1			-et, -u	-t, -tu, -na

②a, ②a' の区別については第 1 活用で述べた通り。

語幹 B は全ての活用形で第 2 音節の母音が脱落し、' は標記上 gh と交代する。

語幹 C では次のような現象が生じる。

- (1) 全ての活用形：' は標記上 j と交代する。
 (2) ①, ②a：第 1 音節の母音が脱落する。
 (3) ②a', ②b：アクセントが第 2 音節に移動する。

4.1.2.1.3. : 第 4 活用

		語幹 A	語幹 B	語幹 C
①	zār 訪れる	CVC zār	CVC- zār-	CVC- zor-
②	htieg 必要とする nstāb 見いだされる	(C)CCĀC htieg nstāb	(C)CCĀC- htieg- nstāb-	(C)CCVC- htig- nstab-
SC 接尾辞 1			-et, -u	-t, -tu, -na

語幹 B は全ての活用形で語幹 A と同形。

語幹 C は全ての活用形で語幹母音が短母音 a, e, i, o のいずれか（選択は語彙的）になる。

4.1.2.1.4. 不規則動詞

	語幹 A	語幹 B	語幹 C
kiel 食べる	kiel	kiel-	kil-
ħa 取る	ħa	ħād-	ħad-
mār 行く	mār	marr-	mor-
qāl 言う	qāl	qāl-	ghīd-
SC 接尾辞 1		-et, -u	-t, -tu, -na

以下の不規則動詞は接尾辞活用形の語幹に関して注意を要する。

kiel 食べる：SC 活用形は規則動詞の第 4 活用である。

ħa 取る：3.m.sg. 以外は語幹末に d が現れる（ħa, ħādet, ħadt, ħadt; ħādu, ħadtu, ħadna）

mār 行く：人称によって語幹が異なる（mār, marret, mort, mort; marru, mortu, morna ; 3.m.sg., 1・2 人称＝第 4 活用、3.f.sg., 3.pl.＝第 3 活用）。ただし 3.m.sg. に接尾代名詞が付くときも d が現れる：ħadu 彼はそれを取った。

qāl 言う：3 人称の語幹と 1・2 人称の語幹が異なる。ただしいずれも第 4 活用（qāl, qālet, ghīdt, ghīdt; qālu, ghīdtu, ghīdna）。

なお、「kien jāf 知っている」は議論の対象となる jāf の部分には SC 語幹がないのでここでは扱わない。

4.1.2.2. : SC 接尾辞 2 の付く動詞活用形

第 3 活用

		語幹 A	語幹 B	語幹 C
①	radd 返す	CVCC radd	CVCC- radd-	CVCCéj- raddéj-
②	mtedd 横になる stkenn 避難する	(C)CCVCC mtedd stkenn	(C)CCVCC- mtedd- stkenn-	(C)CCVCCéj- mteddéj- stkennéj-
SC 接尾辞 2			-et, -éw (-u)	-t, -tu, -na

語幹 B は全ての活用形で語幹 A と同形。3.f.sg. の接尾辞 -et が付くときは語幹母音がアクセントを担う。3.pl. の接尾辞には -ew と -u があり通常は -ew でまれに -u が付くことがある。-ew の場合は語幹母音のアクセントはこの接尾辞に移動するが、-u の場合、アクセントは語幹母音が担う。

語幹 C は全ての活用形で語幹末に ej が添加される。

4.1.2.3. : SC 接尾辞 3 の付く動詞活用形

4.1.2.3.1. : 第 5 活用

		語幹 A	語幹 B	語幹 C
①	bena 建てる／ qara 読む	CVCa béna qára	CC- bn- qr-(āt / -āw)	CCéj- / CCáj- bnéj- / qráj-
①b	semma 名づける	CVCCa semma	CVCC- semm-	CVCCéj- / (CVCCáj-) semméj-
①c	miera 反対する	CĀCa miera	CVC- mer-	CVCéj- / (CVCáj-) meréj-
②a	nheba 隠れる／ xtara 買う	CCVCa nhéba / xtára	CCC- nhb- / xtr-(āt / -āw)	CCCéj- / CCCáj- nhbéj- / xtráj-
②a'	ntnesa 忘れられる	CCCVCa ntnésa	CCCVC- ntnes-	CCCVCéj- / (CCCVCáj-) ntneséj-
②b	ssemma 言及される	CCVCCa ssémma	CCVCC- ssemm-	CCVCCéj- / (CCVCCáj-) ssemméj-
②c	tmiera 矛盾する／ tkāža 馬鹿にする	CCĀCa tmiera tkāža	CCVC- tmer- tkaż-(āt / -āw)	CCVCéj- / CCVCáj- tmeréj- / tkażáj-
SC 接尾辞 3			-iet/ -āt, -ew / -āw	-t, -tu, -na

②a, ②a' の区別については第 1 活用で述べた通り。

語幹 B（上表では 3.f.sg. -āt, 3.pl. -āw の語尾が付く語のみ語尾を示した）では次のような現象が生じる。

- (1) 全ての活用形で語幹末母音が脱落する。
- (2) ①, ②a : 第 1 音節の母音が脱落する。
- (3) ②a' : 語幹母音がアクセントを失う。
- (4) ①c, ②c : 第 1 音節の母音 Ā がアクセントを失い短母音化する。

語幹 C では次のような現象が生じる。

- (1) ①, ②a : 第 1 音節の母音が脱落し、語幹末母音 a の位置に éj または áj（選択は語彙的）が現れる（①b, ①c, ②a', ②b では áj が現れる動詞は確認されない）。
- (2) ①b, ②b : 語幹末母音 a の位置に éj または áj が現れる。
- (3) ①c, ②c : 第 1 音節の Ā がアクセントを失い短母音化するし、語幹末母音 a の位置に éj または áj が現れる。

4.1.2.3.2. 外来動詞

		語幹 A	語幹 B	語幹 C
Fα	stūdja 勉強する	...Ca stūdja	...C- studj-	...Cáj- studjáj-
SC 接尾辞 3			-āt, -āw	-t, -tu, -na
Fβ	pínga 描く	...Ca pínga	...C- ping-	...Céj- pingéj-
Fγ	stabilixxa 設立する	...Ca stabilixxa	...C- stabil-	...Céj- stabiléj-
SC 接尾辞 3			-iet, -éw	-t, -tu, -na

語幹 B では全ての活用形で語幹末母音が脱落する。いずれの場合も活用接尾辞がアクセントを担うので語幹母音はアクセントを失う。また、活用語尾は Fα では 3.f.sg. -āt (studjāt), 3.pl. -āw (studjāw)、Fβ, Fγ では 3.f.sg. -iet (pingiet, stabiliet), 3.pl. -ew (pingew, stabilew) とその分布は一意的に決まる。

語幹 C では語末母音の位置に Fα では áj が、Fβ, Fγ で éj が現れる。

4.1.2.3.3. 不規則動詞

以下の不規則動詞には SC 接尾辞 3 が付く。

	語幹 A	語幹 B	語幹 C
ra 見る	ra	r-	raj-
ta 与える	ta	t-	taj-
SC 接尾辞 3		-āt, -āw	-t, -tu, -na
gie 来る	gie	g-	gej-
wera 見せる	wera	wr-	wrej-
SC 接尾辞 3		-iet, -ew	-t, -tu, -na

語幹 B の活用語尾の選択は語彙的である。

上記の SC 接尾辞に対する活用形の分布をまとめると以下の通り。

SC 接尾辞 1 が付く動詞活用形	第 1 活用 第 2 活用 第 4 活用 不規則動詞の一部 (kiel, ḥa, mār, qāl)
SC 接尾辞 2 が付く動詞活用形	第 3 活用
SC 接尾辞 3 が付く動詞活用形	第 5 活用 外来動詞 不規則動詞の一部 (gie, ra, ta, wera)

4.2. 接頭辞活用形

4.2.1. PC 接辞のタイプ

以下では各活用形から接頭辞活用形のタイプを観察する。第 5 活用の一部を 3.m.sg. の語末母音によって α , β , γ に分ける。また、外来動詞には 3 種類の活用タイプがあり、 $F\alpha$, $F\beta$, $F\gamma$ に分ける（不規則動詞に付いては後述）。接頭辞活用形は複数形の人称で接尾辞が付く。

	第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 4 活用
3.m.sg.	j-áqbad	j-ínza'	j-rodd	j-žūr
3.f.sg. & 2.sg.	t-áqbad	t-ínza'	t-rodd	ž-žūr
1.sg.	n-áqbad	n-ínza'	n-rodd	n-žūr
3.pl.	j-áqbd-u	j-ínžgh-u	j-rodd-u	j-žūr-u
2.pl.	t-áqbd-u	t-ínžgh-u	t-rodd-u	ž-žūr-u
1.pl.	n-áqbd-u	n-ínžgh-u	n-rodd-u	n-žūr-u
	第 5 活用			
	α	β	γ	
3.m.sg.	j-áqra	j-ínsa	j-íbni	
3.f.sg.	t-áqra	t-ínsa	t-íbni	
2.sg. & 1.sg.	n-áqra	t-ínsa	t-íbni	
3.pl.	j-aqr-āw	j-ins-éw	j-íbn-u	
2.pl.	t-aqr-āw	t-ins-éw	t-íbn-u	
1.pl.	n-aqr-āw	n-ins-éw	n-íbn-u	
	外来動詞			
	$F\alpha$	$F\beta$	$F\gamma$	
3.m.sg.	ji-stūdja	j-píngi	ji-stabilíxxi	
3.f.sg.	ti-stūdja	ti-píngi	ti-stabilíxxi	
2.sg. & 1.sg.	ni-stūdja	ni-píngi	ni-stabilíxxi	
3.pl.	ji-studj-āw	j-píng-u	ji-stabilíxx-u	
2.pl.	ti-studj-āw	t-píng-u	ti-stabilíxx-u	
1.pl.	ni-studj-āw	n-píng-u	ni-stabilíxx-u	

上表から、次の 3 種類の活用接辞の体系（「PC 接辞 1」～「PC 接辞 3」）が認められる。

	PC 接辞 1	PC 接辞 2	PC 接辞 3
	第 1 ～ 4, 第 5 活用① γ , ①b, ①c, $F\beta$, $F\gamma$	第 5 活用① α , ②c, $F\alpha$	第 5 活用① β , ②a, ②b
3.m.sg.	j(i)-...	j(i)-...	j(i)-...
3.f.sg. & 2.sg.	t(i)-...	t(i)-...	t(i)-...

1.sg.	n(i)-...	n(i)-...	n(i)-...
3.pl.	j(i)-...-	j(i)-...-āw	j(i)-...-éw
2.pl.	t(i)-...-u	t(i)-...-āw	t(i)-...-éw
1.pl.	n(i)-...-u	n(i)-...-āw	n(i)-...-éw

接頭辞の異形態については 3.2.1.2. を見よ。また、活用接頭辞 t- が ċV, dV, ġV, sV, xV, žV, zV で始まる動詞語幹に付くとき、t- はそれぞれの子音に同化する：t- + ċempel > ċċempel など。

PC 接辞 2・3 の活用接尾辞 -āw, -éw はアクセントを担うので、これらが付く動詞語幹の母音はアクセントを失う。Ā を含む c 語幹では、この Ā が短母音化し、a, e, i のいずれか（選択は語彙的）で実現する。

また、活用接尾辞の有無によって次の 2 種類が認められ、語幹 A・B と表示する。

接尾辞ゼロ（単数形）：語幹 A

母音で始まる活用接尾辞（複数形：-u, -ew, -āw）：語幹 B

4.2.2. 接辞を伴う語幹の異形態

動詞語幹は上記で確認した①②の 2 つの状況下で異形態が生じる。以下では PC 接尾辞ごとに語幹の異形態を観察する。

4.2.2.1. PC 接辞 1 が付く動詞活用形

4.2.2.1.1. 第 1 活用

		語幹 A	語幹 B
①	qabad 掴む	-ŴCCVC -áqbad	-ŴCCC- -áqbd-
	wasal 到着する／ waqaf 止まる	-ŴCVC / -ieVCV -ásal / -jiejaf	-ŴCC- / -ieCC- -ásl- / -ieqf-
①	qabad 掴む	-ŴCCVC -áqbad	-ŴCCC- -áqbd-
②a	nkiteb 登録する ntrabat 結ばれる	-(C)CCŴCVC -nkiteb -ntrábat	-CCŴCC- -nkitb- -ntrábt-
②b	naddaf 掃除する tkellem 話す stkerrah 嫌う	-(C)(C)CŴCCVC -náddaf -tkellem -stkerrah	-(C)(C)CŴCCC- -náddf- -tkellm- -stkerrh-
②c	siefer 旅する tqābad 喧嘩する	-(C)CĀCVC -siefer -tqābad	-(C)CĀCC- -siefr- -tqābd-

PC 接辞 1	j(i)-... etc.	j(i)-...-u etc.
---------	----------------------	------------------------

語幹 B で次のような現象が生じる。

- (1) 全ての活用形で第 2 音節の母音が脱落する。
 (2) ①の動詞で第 2 根素が流音 (l, m, n, r) または gh の動詞では第 2 根素の前に補助母音 (音韻論的に予測できる場合と語彙的な場合がある) が挿入される (第 1 根素が gh の場合を除く)。

	語幹 A	語幹 B
遊ぶ	jilghab	jilaghbu
元気である	jiflah	jifilhu
認知する	lemaħ	jilimħu
掃く	jiknes	jikinsu
飲む	jixrob	jixorbu

- (3) ②b : (1) 第 2 根素の部分が ww, jj となっている場合、語幹 C でそれぞれ単子音化し w, j となる。(2) 第 2 根素と第 3 根素が同一子音の場合 (例 √ ġ-d-d)、語幹 B では 3 重子音が生じるが、これが 2 重子音となる (4.1.2.1.1.を参照)。

	語幹 A	語幹 B
(1) 起こす	-qájjem	-qájm-
(2) 刷新する	-ġédDED	-ġedd-

4.2.2.1.2. : 第 2 活用

		語幹 A	語幹 B
①	neža' 掴む	-VCCa' -ínža'	-VCCgh- -ínžgh-
	wesa' 容量がある	-VCa' -ésa'	-VCgh- -ésgh-
②a	ltaqa' 会う	-(C)CCVCa' -ltaqa'	-CCVCgh- -ltaqgh-
	nstema' 聞こえる	-nstéma'	-nstémgh-
②b	semma' 聞かせる	-(C)(C)CVCCa' -semma'	-(C)(C)CVCCgh- -sémmgh-
	tbežža' 恐れる	-tbežža'	-tbežžgh-
PC 接辞 1		j(i)-... etc.	j(i)-...-u etc.

語幹 B で次のような現象が生じる。

- (1) 全ての活用形：第 2 音節の母音が脱落する。また ' は標記上 j と交代する。
 (2) ①の動詞で第 2 根素が流音 (l, m, n, r) または gh の動詞では第 2 根素の前に補助母音 (音韻論的に予測できる場合と語彙的な場合がある) が挿入される (例示省略 - 4.2.2.1.1. を見よ)。

4.2.2.1.3. : 第3活用

		語幹 A	語幹 B
①	radd 返す	-CVCC -rodd	-CVCC- rodd-
②	mtedd 横になる stkenn 避難する	-(C)CCVCC -mtedd -stkenn	-(C)CCVCC- -mtedd- -stkenn-
PC 接辞 1		j(i) -... etc.	j(i) -...-u etc.

語幹 A と語幹 B は同形である。

4.2.2.1.4. : 第4活用

		語幹 A	語幹 B
①	zār 訪れる	-CṼC -zūr	-CṼC- -zūr-
②	ḥtieġ 必要とする nstāb 見いだされる	-(C)CCṼC -ḥtieġ -nstāb	-(C)CCṼC- -ḥtieġ- -nstāb-
PC 接辞 1		j(i) -... etc.	j(i) -...-u etc.

語幹 A と語幹 B は同形である。

4.2.2.1.5. : 第5活用①β, ①b, ①c

		語幹 A	語幹 B
①γ	bena 建てる	-ṼCCi -ibni	-ṼCC- -ibn
①b	semma 言及する	-CṼCCi -semmi	-CṼCC- -semm-
①c	miera 反対する	-CĀCi -mieri	-CĀCC- -mier-
PC 接辞 1		j -... etc.	j -...-u etc.

語幹 B では語幹末母音が脱落する。

4.2.2.1.6. : 外来動詞 Fβ, Fγ

		語幹 A	語幹 B
Fβ Fγ	pinga 描く stabilixxa 創設する	-...Ci -pingi -stabilixxi	-...C -ping- -stabilixx-
PC 接辞 1		j(i) -... etc.	j(i) -...-u etc.

語幹 B では語幹末母音が脱落する。

4.2.2.1.6. 不規則動詞

	語幹 A	語幹 B
(kien) jāf 知っている	-āf	-āf-
gie 来る	-ġi	-ġi-
ha 取る	-iehu	-iehd-
kiel 食べる	-iekol	-iekl-
mār 行く	-mūr	-morr-
qāl 言う	-ġhid	-ġhid-
ta 与える	-aghti	-aght-
wera 見せる	-ūri	-ūr-
PC 接辞 1	j-... etc.	j-...-u etc.

以下の不規則動詞は語幹に関して注意を要する。

ha 取る：語幹 B で語幹末に d が現れる (3.pl. jiehdu)。また、語幹 A でも接尾代名詞が付くと d が現れる：jiehdu 彼はそれを取る。

mār 行く：語幹 A では第 4 活用形 (3.m.sg. jmūr)、語幹 B では第 3 活用形 (3.pl. jmorru)。

qāl 言う：代表形とは異なる語幹が用いられる (3.m.sg. jġhīd)。

4.2.2.2. PC 接辞 2 が付く動詞活用形

4.2.2.2.1. 第 5 活用①α, ②c²⁹⁾

		語幹 A	語幹 B
①α	qara 読む	-VCCa -áqra	-VCC- -aqr-
②c	tkāža 馬鹿にする	-CCĀCa -tkāža	-CCVC -tkaż-
PC 接辞 2		j(i)-... etc.	j(i)-...-āw etc.

語幹 B で次のような現象が生じる。

(1) 全ての活用形：第 1 音節の母音がアクセントを失い、語幹末母音が脱落する。

(2) ②c：第 1 音節の母音 Ā がアクセントを失い短母音化する。

4.2.2.2.2. 外来動詞 Fa

		語幹 A	語幹 B
Fa	stūdja 勉強する	-...Ca -stūdja	-...C- -studj-
PC 接辞 2		j(i)-... etc.	j(i)-...-āw etc.

語幹 B では語幹末母音が脱落する。

29) ②c の動詞には PC 接辞 3 が付くものもある。下記 4.2.2.3. を見よ。

4.2.2.2. 不規則動詞「ra 見る」

	語幹 A	語幹 B
ra 見る	-āra	-ar-
PC 接辞 2	j -... etc.	j -...-āw etc.

語幹 B では語幹末母音が脱落、第 1 音節の母音 $\bar{A}$ がアクセントを失い短母音化する。

4.2.2.3. PC 接辞 3 が付く動詞活用形

第 5 活用①β, ②a, ②a', ②b, ②c³⁰⁾

		語幹 A	語幹 B
①β	nesa 忘れる	- $\dot{V}$ CCa -insa	-VCC- -ns-
②a ②a'	nheba 隠れる ntnesa 忘れられる	-(C)CC $\dot{V}$ Ca -nhéba -ntnésa	-(C)CCVC- -nhb- -ntnes-
②b	ssemma 言及される	-CC $\dot{V}$ CCa -ssémma	-CCVCC- -ssem-
②c	tnieda 公表される	-CC $\bar{A}$ Ca -tnieda	-CCVC -tnid-
PC 接辞 3		j(i) -... etc.	j(i) -...-éw etc.

語幹 B では次のような現象が生じる。

- (1) 全ての活用形で語幹末母音が脱落する。
- (2) ②a：第 1 音節の母音が脱落する。
- (3) ②a', ②b：第 1 音節の母音のアクセントが失われる。
- (4) ②c：第 1 音節の母音 $\bar{A}$ がアクセントを失い短母音化する。

上記の PC 接辞に対する活用形の分布をまとめると以下の通り。

PC 接辞 1 が付く動詞活用形	第 1 活用 第 2 活用 第 3 活用 第 4 活用 第 5 活用①γ, ①b, ①c 外来動詞 Fβ, Fγ 不規則動詞の一部 (gie, idda, iżza, ta, wera, kiel, ħa, mār, jāf, qāl)
------------------	--

30) ②c の動詞には PC 接辞 2 が付くものもある。上記 4.2.2.2.1. を見よ。

PC 接辞 2 が付く動詞活用形	第 5 活用①α, ②c 外来動詞 Fa 不規則動詞の一部 (ra)
PC 接辞 3 が付く動詞活用形	第 5 活用①β, ②a, ②a', ②b

4.3. 命令形

命令形の単数形は接頭辞活用形の語幹 A、複数形は語幹 B に pl. の接尾辞を付けたものである。

		単数	複数
第 1 活用	qabad 掴む	áqbad	áqbd-u
第 2 活用	neža' 脱ぐ	ínža'	ínzgh-u
第 3 活用	radd 返す	rodd	rodd-u
第 4 活用	zār 訪問する	zūr	zūr-u
第 5 活用	nesa 忘れる qara 読む bena 建てる	ínsa áqra ibni	ins-éw aqr-āw ibn-u
Fα	stūdja 勉強する	stūdja	studj-āw
Fβ	pinga 忘れる	pingi	ping-u
Fγ	stabilixxa 創設する	stabilixxi	stabilixx-u
不規則動詞	jāf 知っている mār 行く qāl 言う ra 見る ta 与える wera 見せる	āf mūr ghīd āra aghti ~ ti ūri	āf-u morr-u ghīd-u ar-āw aght-u ūr-u

次の不規則動詞の命令形は補充法、不規則な音変化などによる。

不規則動詞	gie 来る ħa 取る kiel 食べる	éjja ħu (ħūd ³¹) kūl	ejj-éw ħūd-u kūl-u
-------	-----------------------------	--	--------------------------

4.4. 分詞

活用接辞とは無関係だが、動詞から派生し、動詞語幹に接頭辞を付けて作るものもあるので、ここで紹介しておく。

第 1・2・4 活用形①、第 5 活用形①動詞、不規則動詞の一部には能動分詞・受動分詞の区別があるが、これら以外にはその区別はない。能動・受動の区別のない場

31) 接尾代名詞が付くと d があらわれる（上記 4.2.2.1.6. を見よ）。

合、自動詞由来のものは能動分詞、他動詞由来のものは受動分詞として機能する。また外来動詞の分詞はイタリア語の受動分詞の形成方法に準じたものなので受動分詞として機能する。

なお、動詞によっては分詞を欠いているもの、不規則な形成をするものもあるので相当程度語彙的なものである。

能動分詞			
活用形	動詞	語形	能動分詞
第1活用①	hareg 出る	CĀCVC	hiereg
第2活用①	tela' 上がる	CĀCa'	tiela'
第4活用①	sār 行く	CVjjVC	sejjer
第5活用①α, ①β, ①γ	mexa 歩く	CĀCi-	miexi
不規則動詞の一部	gie 行く		ġej
受動分詞			
活用形	動詞	語形	受動分詞
第1活用①	kiteb 書く	mVCCūC	miktūb
第2活用①	sema' 聞く	mVCCūgh	msimūgh
第3活用①	radd 返す	mVCCūC	midrūd
第4活用①	qies 測る	mVCjūC	miqjūs
第5活用①α, ①β, ①γ	benā 建てる	mVCCi	mibni
不規則動詞の一部	ha 取る		mehūd
	idda 輝く		middi

活用形	動詞	語形	受動分詞
Fα	stūdja	-āt	studjāt
Fβ	pinga	-ūt, -īt	pingūt
Fγ	stabilixxa	-ūt, -īt	stabiliet
分詞			
活用形	動詞	語形	分詞
第1活用②	naddaf	m(i)-+PC 語幹 A	mnaddaf
第2活用②	semma'		msemma'
第3活用②	mtedd		mimtedd
第4活用②	htieg		mihtieg
第5活用①b, c	semma		msemmi
第5活用②a, b, c	nbenā		minbenā
不規則動詞の一部	wera		muri ³²⁾

32) Aquilina (1965) p. 196 では動詞 ra の受動分詞とされているが、Aquilina (1987-1990) vol. 2 p.1167 では wera の受動分詞となっている。形態的には後者であろうし、また実際の用法としても「示される」の意味で使われている。

5. 語幹と活用接辞

ここで各活用形の語幹と活用接辞の種類をまとめる

5.1. 語幹

第 1 活用	SC 語幹	PC 語幹
①	CVCVC	VCCVC
②a	CCVCVC	
②a'	CCCVVCVC	
②b	(C)(C)CVCCVC	
②c	(C)CĀCVC	
第 2 活用	SC 語幹	PC 語幹
①	CVCa'	VCCa'
②a	CCVCa'	
②a'	CCCVCa'	
②b	(C)CVCCa'	
第 3 活用	SC 語幹	PC 語幹
①	CV _i CC	CV _j CC
②	(C)CCVCC	
第 4 活用	SC 語幹	PC 語幹
①	CV̄ _i C	CV̄ _j C
②	(C)CCV̄C	
第 5 活用	SC 語幹	PC 語幹
①α	CVCa	VCCa (3.pl. VCCāw)
①β	CVCa	VCCa (3.pl. VCCew)
①γ	CVCa	VCCi
①b	CVCCa	CVCCi
①c	CĀCa	CĀCi
②a	CCVCa	
②a'	CCCVCa	
②b	CCVCCa	
②c	CCĀCa	

①＝SC 語幹と PC 語幹が異なるもの

②＝SC 語幹と PC 語幹が同一

a＝語幹末音節の前の音節が CCV

a'＝語幹末音節の前の音節が CCCV

b＝語幹末音節の前の音節が (C)(C)CVC

c＝語幹末音節の前の音節が (C)CĀ

外来動詞は次のように分類する。

外来動詞	SC 語幹	PC 語幹
F α	-a	-a
F β	-a	-i
F γ	-ixxa	-i

5.2. 活用接辞

SC 接尾辞	SC 接尾辞 1	SC 接尾辞 2	SC 接尾辞 3
3.m.sg.	-	-	-
3.f.sg.	-et	-et	-iet / -āt
2.sg. & 1.sg.	-t	-t	-t
3.pl.	-u	-éw (-u)	-éw / -āw
2.pl.	-tu	-tu	-tu
1.pl.	-na	-na	-na
PC 接辞	PC 接辞 1	PC 接辞 2	PC 接辞 3
3.m.sg.	j(i)-...	j(i)-...	j(i)-...
3.f.sg. & 2.sg.	t(i)-...	t(i)-...	t(i)-...
1.sg.	n(i)-...	n(i)-...	n(i)-...
3.pl.	j(i)-...-u	j(i)-...-āw	j(i)-...-éw
2.pl.	t(i)-...-u	(i)t-...-āw	t(i)-...-éw
1.pl.	n(i)-...-u	n(i)-...-āw	n(i)-...-éw

6. 接尾辞活用形語尾と接頭辞活用形語尾との関係

以上では SC と PC の活用語尾の変種の分布を観察してきた。ここでは両者の組み合わせについて述べる。第 1 活用～第 4 活用と外来動詞は接尾辞活用と接頭辞活用形と活用形式の組み合わせが一意的に決まる。

SC 接尾辞 1 + PC 接辞 1	第 1 活用・第 2 活用・第 4 活用 不規則動詞の一部 (kiel, ḥa, mār, kien jāf, qāl)
SC 接尾辞 2 + PC 接辞 1	第 3 活用
SC 接尾辞 3 + PC 接辞 1	第 5 活用① γ , ①b, ①c 外来動詞 F β , F γ 不規則動詞の一部 (ġie, ta, wera)
SC 接尾辞 3 + PC 接辞 2	第 5 活用① α , ②c 外来動詞 F α 不規則動詞の一部 (ra)
SC 接尾辞 3 + PC 接辞 3	第 5 活用① β , ②a, ②a', ②b

7. 語彙情報の表示

以上のように音節構造を基準にして動詞語幹を整理し、第1～第5活用、外来動詞、不規則動詞に分類した。また活用接辞の体系も整理して動詞語幹との組み合わせを確認した。実際に、或る動詞についてその活用形（接尾辞活用形・接頭辞活用形・命令形）を知るために必要な情報は以下のとおりであり、ここではその提示方法を提案する。

以下では動詞語幹を分類する際に使った表示「第1活用②a」「第5活用①α」なども併せて示す。ただしこの表記では簡便に語彙情報を示しにくいので「第1～第5活用」はそれぞれ I, II, III, IV, V のように、①②（以下では必要に応じて「①動詞」「②動詞」などと呼ぶ）は 1, 2 として両者をハイフンで結ぶことにする。これらの語彙情報は { } 内に示す。また以下では「能動分詞」は ap.、「受動分詞」は pp.、「分詞」は p.、「不規則動詞」は IR とする。

なお、外来動詞、不規則動詞については後述する。

（1）代表形（接尾辞活用形 3.m.sg.）{ } 内は語幹の種類

qabad {I-1} 掴む

semma' {II-2a} 聞かせる

radd {III-1} 返す

htieg {IV-2} 必要とする

bena {V-1} 建てる

（2）接尾辞活用形の補足的な語彙情報（動詞語幹の表示と、補足的な語彙情報の間にコロンを書く。

第1活用①c, ②c 動詞、第5活用①c, ②c 動詞の語幹 C の第1音節で現れる短母音 (1sg. & 2sg.) ³³⁾

siefer {I-2c : sifirt} 旅する

miera {V-1c : meriet} 反対する

第4活用形の語幹 C の短母音 (1sg. & 2sg.)

zār {IV-1 : zort} 訪問する

htieg {IV-2 : htigt} 訪問する

第5活用形の 3.f.sg.

bena {V-1γ : bniet} 建てる

xtara {V-2a : xtrāt} 買う

33) ただし語幹 A で ā が現れる動詞は規則的に語幹 C で a となるので示す必要はない。

(3) 「①動詞」の接頭辞活用形 3.m.sg.

qabad {I-1 : jaqbad} 掴む
 waqaf {I-1 : jieqaf} 止まる
 sema' {II-1 : jisma'} 聞く
 radd {III-1 : jrodd} 返す
 zār {IV-1 : zort, jzūr} 訪問する
 qara {V-1α : qrāt, jaqra} 読む
 bena {V-1γ : bniet, jibni} 建てる
 nesa {V-1β : nsiet, jinsa} 忘れる

「②動詞」は SC 語幹と PC 語幹が同一なのでこの情報は不要である。

nkiteb {I-2a} 登録する (PC 3.m.sg. jinkiteb)
 ssemma {V-2b} 言及される (PC 3.m.sg. jissemma)
 siefer {I-2c : sifirt} 旅する (PC 3.m.sg. jsiefer)

(4) 接頭辞活用形の補足的な文法情報

第5活用①α および①β の 3.pl.

qara {V-1α : qrāt, jaqra, jaqrāw} 読む
 nesa {V-1β : nsiet, jinsa, jinsew} 忘れる

(5) 「①動詞」で第2根素が流音 (l, m, n, r) または gh である動詞の語幹 B で現れる補助母音 (3.pl.)

laghab {I-1 : jilghab, jilaghbu} 遊ぶ

(6) 分詞

分詞は各動詞について存在する場合に語彙情報として示す。

qabad {I-1 : jaqbad, pp.maqbūd} 掴む
 qaghad {I-1 : joqghod, joqoghdu, ap.qieghed} 住む
 paxxa {V-1b : paxxiet, jpassi, pp. paxxūt} 喜ばせる³⁴⁾
 siefer {I-2c : sifirt, p. msiefer} 旅する

外来動詞は、Fα, Fβ, Fγ の表示で必要な語彙情報は得られるので、分詞の情報のみ示す。

stūdja {Fα : pp. studjāt} 勉強する
 pinga {Fβ : pp. pingūt} 描く
 stabilixxa {Fγ : pp. stabilīt, stabilixxīt} 創設する

34) この動詞はロマンス語起源の動詞だが、語形態はセム語動詞と同様なので外来動詞としない。ただし分詞はロマンス語の受動分詞の形態となる (上記 3.1.5. 参照)。

不規則動詞は代表形、接尾辞活用形 3.f.sg.、接頭辞活用形 3.m.pl. (-a で終わる動詞は 3.pl. も)、分詞の情報を示す。

gie {IR : ġiet, jġi, ap. ġej} 来る

ra {IR : rāt, jāra, jarāw} 見る

ta {IR : tāt, jaghti, pp. moghti} 与える

wera {IR : uriet, jūri, pp. mūri} 見せる など

8. まとめ

本論考ではマルタ語動詞の実態に基づく、より合理的な動詞体系の再構築を試みた。歴史的な要素や語根と言ったセム語の動詞体系の説明に必要と考えられたものを考慮せずに（分析の上でのツールとしては用いた）、動詞語幹の音節構造を基準に第 1 活用から第 5 活用、外来動詞、不規則動詞のようにラベル付けをした（第 3 節）。また SC 活用接辞と PC 活用接辞の異形態を整理し、動詞語幹との組み合わせを明瞭にし（第 4 節）、一覧表にまとめた（第 5 節）。その結果、接尾辞活用形と接頭辞活用形の活用接辞の組み合わせ方に 5 つのパターンがあることが確認できた（第 6 節）。またある活用形に固有の語彙的な条件も体系化した（第 7 節）。

[参考文献]

長渡陽一 「マルタ語の動詞語幹母音再建」『アジア・アフリカ言語文化研究』64 (2002) 153-172.

Ambros, A.A., *Bongornu, kif int? Einführung in die maltesische Sprache* (Wiesbaden 1998).

Aquilina, J. *Maltese Teach Yourself Books* (London 1965).

Aquilina, J., *Maltese-English Dictionary* 2 vols. Midsea books (Malta 1987-1990).

Borg, A., “On Some Levantine Linguistic Traits in Maltese” in *Studies in Modern Semitic Languages*, eds. Sh. Izre’el & Sh. Raz (IOS XVI) (1997) 133-152.

Brother Henry F.S.C., *Grammatika Maltija* 6th ed. (Malta 1980).

Cachia, L., *Grammatika Ġdida tal-Malti* (Żabbar 1994).

Camilleri, M. *The stem in inflectional verbal paradigms in Maltese* Doctoral thesis, University of Surrey (2014 University of Surrey).

Cremona, A. “The Classification of the Maltese Verb” *Journal of Maltese Studies* 1 (1961) 117-129.

Grand’henry, J. “Le verbe réfléhi-passif à t- préfixé de la forme simple dans les dialects arabes” *Le Muséon* 88 (1975) 441-447.

Grand’henry, J. “Les variantes de flexion dans les verbes géminés en arabe” *Folia Orientalia* 28 (1991) 99-114.

Hoberman, R.D. & M. Aronoff, “The verbal morphology of Maltese: From Semitic to Romance” in J. Shimron (ed) *Language Processing and Acquisition in Languages of Semitic, Root-Based, Morphology*, (Amsterdam / Philadelphia 2003) 61-78.

Kaye, A.S., & J. Rosenhouse, “Arabic Dialects and Maltese” in *The Semitic Languages* R.Hetzron ed. (1997) 263-311.

Panzavecchia, F., *Grammatica della Lingua Maltese spiegata secondo i principj delle lingue orientali e della lingua Italiana* (Malta 1845).

- Soldanis de, A. *Della Lingua Punica presentements usata da Maltese &c. ovvero Nuovi Documenti li quali possono servire di lume all'antica lingua etrusca stesi in due dissertazioni &c. dal canonico* (Roma 1750).
- Sutcliffe, E.F., *A Grammar of the Maltese Language with Chrestomathy and Vocabulary* (London 1936).
- Vassalli, M.A., *Mylsen Phoenico-Punicum sive Grammatica Melitensis* (Roma 1791).
- Vassalli, M.A., *Grammatica della Lingua Maltese*, 2 ed. scritta in Italiano, molto accresciuta, ed in miglior ordine ridotta dal medesimo (Malta 1827).
- Vella, F. *Maltese Grammar for the Use of the English* (Leghorn 1831).
- Wettinger, G. "The Arabs in Malta" in *Studies of its Heritage and History* (Valletta: Mid-Med Bank 1986) 87-104.
- Wettinger, G. "The 'Norman' Heritage of Malta: Godfrey Wettinger sifts the evidence surrounding Count Roger's visit in 1091" *Treasures of Malta* 1(3) (1995) 34-39.
- Wilmsen, D. & A. Al-Sayyed, "On Morpho-Syntactic Levantisms in Maltese" in *Studies on Arabic Dialectology and Sociolinguistics Proceedings of the 12th International Conference of AIDA held in Marseille from May 30th to June 2nd 2017*, eds. C. Miller et. al. (2019) 309-322.